

国際語としての英語における標準語イデオロギーと規範主義

Standard Language Ideologies and Prescriptivism on English as an International Language

行森 まさみ

Masami YUKIMORI

キーワード

国際語としての英語、標準語イデオロギー、規範主義

English as an international language, standard language ideology, prescriptivism

Abstract: The aim of this paper is twofold. First, it compares and contrasts three terms that describe English as an international language: World Englishes (WE), English as an international language (EIL), and English as a lingua franca (ELF). These three terms share a concept of the emancipation from the native speakers' varieties of English and emphasize the diversity of the language. Furthermore, based on these terms, it discusses the dilemma between intelligibility and diversity. In order to maintain intelligibility, it is essential for an international language to maintain the core of the language that generally relies on the norms of the native speakers' variations of English. Superiority over any other varieties and language attitudes can be assumed once these variations are recognized as the standard. Secondly, the paper examines the standard language ideologies that lead to prescriptivism. It is a linguistic bias that focuses on the language system rather than the language performance, which drives over-simplified views of the nature of language. Finally, this paper proposes that raising awareness of sociolinguistic language phases is crucial for an English speaker of one of the language's many varieties.

79

1. はじめに

現代社会において英語は、政治、経済、教育、ビジネス等、広範囲かつさまざまな分野にわた

って主要言語として機能し、国際語としての役割を一手に担っている。その背景には、英語という言語を話す話者たちがもつ力 (power) の存在が指摘されている。今日ほどまでに英語が広がりを見せることとなる発端は、英語母語話者たちの国家であるイギリスが有する軍事力によって展開され、19世紀末にピークに達した植民地の拡大にほかならない。これによってイギリスはアメリカ大陸、アフリカ、アジア、オセアニアの多くの国々に英語をもたらし、英語の国際語としての地位の礎を築いた。さらには、もう一つの英語母語話者たちの国家であるアメリカの軍事力、経済力、科学技術力、エンターテインメント等を含んだ文化を基にした20世紀における国際影響力が、英語の国際語としての地位を決定的なものに押し上げたとされている (Troike, 1977, p.2)。現在ではさらに、インターネットに代表される情報システムとの結びつきもその要因のひとつとして加わることとなった。

また、平賀 (2016, p.168) は英語史の見地から、英語の語彙がラテン語やフランス語などのヨーロッパ諸語からの借用が多い点を指摘し、それが、英語が世界中で使用されるようになったひとつの理由であるとしている。ヨーロッパ諸語の話者からみれば、英語は語彙のレベルで親しみやすいものであり、理解、習得が比較的容易であることが予想できる。これらの要素が重なり合い、英語は現代の世界で他の言語にはみられない国際語としての地位を確立してきたのである。

このような世界における英語の拡散には、必然的に生じる英語という言語の多様化の問題がある。世界の英語話者たちは、英米語をそのまま受容し、どちらかの英語変種とはっきり分類されるような英語を話しているわけではなく、その地域におけるそれぞれの言語的特徴をともなった、さまざまな変種が生じているのである。

本稿ではまずこの英語の多様性について、World Englishes (WE) の研究分野で述べられる知見を概観し、さらに現代の国際語としての英語における研究分野である English as an International Language (EIL) および English as a Lingua Franca (ELF) と比較し、その相違点と共通点を議論する。また、それらの三つの分野に共通する「母語話者英語からの解放」について言語態度の観点から検証し、標準語と規範主義的態度の問題点について議論する。現代の英語がもつ国際語としての機能における利便性や、英語をツールとして使用することに対する重要性の主張が広く叫ばれるなか、母語話者英語の単なる模倣から解放され、国際語としての英語にいかに向き合うかを考えるうえで、本稿における議論がその一助となることを期待するものである。

2. 英語の多様性と共通性

まず本章では、英語の多様性と共通性の観点から、WE、EIL、ELFの研究分野を比較検証していきたい。

Honna (2008, p.10) は言語の拡大化と多様化は必ず同時発生するとし、英語が国際化 (拡大化) すればするほど、必然的に多様化するとしている。そのような現象が世界的に進んでいった1960年代頃からは、地域変種があまりにも独自の発展をし、相互理解性を妨げているのではないかという点が議論されることとなった。とくにこの議論は、イギリスの植民地から独立したインド等の各国家における英語について焦点化されたものであり、母語話者規範からの大幅な逸脱による「正当」英語の劣化を憂うといった性質を帯び、主に母語話者である研究者たちによってなされたものであった。Prator (1968) らはそのような英語の各地域変種について、独立した変種モデルとしてその言語的規範を認めることを否定したうえで、母語話者英語の正統性を主張し

た。

しかしそれに対し、それは偏見的な排他主義 (linguistic chauvinism) だとし、英米語とは異なる変種としての使用域があり、ある程度の言語体系が存在するという現状や、地理的・文化的差異からスコットランド英語やオーストラリア英語等が変種として容認されているように、インド英語等も変種として、また言語教育上のモデルとして認められるべきだとする声もあがった (Halliday, McIntosh & Stevens, 1964)。その代表的な研究者が、インド出身である Braj B. Kachru (1976, 1982, 1985, 1992, 2005) である。彼はインドを含めた英米の旧植民地における英語の土着化や母語化について調査し、英語が新たに担うこととなる、ポスト・コロニアル時代の多民族・多言語国家統一のための言語機能に主たる関心をおいた研究を行なった。第二言語として英語 (English as a Second Language: ESL) を扱う地域が生み出す新たな英語を描写分析することによって、その独自性や正当性を主張した。のちに彼は、国際英語の研究分野における大きな一角となる World Englishes を提唱する。

2. 1. WE (World Englishes) : 多様性と地域変種の権利

Kachru (1992) はよく知られることになる三つの同心円 (Three Concentric Circles) モデルを用いて、言語の広がり方や習得のなされ方、社会の中で担う機能といった観点を中心に、世界の多様化した英語の状況を三つのグループに分けて説明している。一つ目は内円圏 (Inner Circle) と呼ばれるグループで、これには英語が母語として使用されている国が含まれる¹。これらの国々では英語は第一言語であり、国民のほとんどに母語として習得され、実際の生活の中で使用されている。つぎに、外円圏 (Outer Circle) と呼ばれるグループでは、英語がその国民の第一言語ではないが、公用語や準公用語として定められていたり、国内の多言語状況の中で重要な役割を果たしていたりする。第一言語ではないため、母語として獲得しているというよりは、むしろ ESL として日常生活や学校教育を通じて習得されているケースが多いところにその特徴がある。このグループには過去に植民地支配を受けていた国々が含まれる²。最後に、拡大円圏 (Expanding Circle) と呼ばれる英語圏に属さない多くの国々³ を含むグループがあり、その特徴のひとつは英語が外国語として学校教育の中で学ばれている点である (English as a Foreign Language: EFL)。このグループの英語使用者は、英語を母語としてではなく学習言語として扱い、日常生活における使用というよりはむしろビジネスにおける必要性や、あるいは限られた範囲でのコミュニケーション等の目的で、必要に応じて英語を使う。

Kachru が提唱したこのモデルは、ESL の位置づけを明確にし、その正当性の主張を推進させるという本来の目的に加えて、世界における英語の多様性を簡潔に分類していることから、多くの研究者たちによって引用されてきたが、批判もある。Pennycook (2007) はこのモデルの限界について、言語が国家単位のみで扱われている点について指摘している。英語に関する国ごとの分類はある程度において説得力のあるものだが、当然のこととして各国家の国内にも、地域・コミュニティの方言や職業等による言語使用の差異など、多くの異なった変種が存在していることが捨象されてしまう可能性をあげている。Bolton (2002, p.12) は、両親が母語話者であっても外国育ちである子ども等は、英語は話す英語圏文化への帰属意識もあまりない場合があり、このようなケースが増加し一般的になったとき、母語話者と内円圏は必ずしも国家だけで結びつけられないのではないかと指摘している。Yano (2009, pp.212-215) も同様に、社会が多様化している状況で、英語使用の分類を単純に地域のみで行うのは難しく、これからは個人をベースにした分類が求められるであろうと述べている。

さらに、Kachru自身が述べている点は、これらの三つの円のいずれにも分類することが難しい国があるということである。たとえば、南アフリカは英語を母語として使用するイギリス系あるいはインド系の国民もいるが、その他多くの国民は英語を教育で学ぶ言語としていて、共通語としての機能を果たすのは国会や政府の公用語が大半を占めるという現状がある。また、内円圏に属するカナダの公用語は、英語のみならずフランス語もあり、ニュージーランドにおいても、もうひとつの公用語にはマオリ語があるという、英語のみが純粋な公用語とは言いきれない状況がある。

言語の分類はさまざまな地域的・社会的要因、実際の使用状況等を考慮して慎重に行われるべきものであり、とくに国際語と称されるようになった英語の世界的な使用状況を三つに分類するという単純化には、以上にあげたような批判がともなう。

このようにさまざまな議論がなされ、広く知られることとなったKachruの同心円モデルを用いた説明によって、World Englishesは世界のあらゆる英語変種の記述、分析における研究アプローチを示す分野として理解されていることが多々ある。実際に、*The Handbook of World Englishes* (Kachru, Kachru & Nelson, 2006) では、現代英語のあらゆる地域変種やそれを取り巻く諸相について扱い、クレオール英語⁴ (Mufwene, 2006) や、内円圏のアメリカにおけるアフリカ系アメリカ英語 (African American Vernacular English) (Wolfram, 2006) などについても広く取り入れている。

ELFを提唱したJenkins (2006) も、WEは外円圏における諸英語をさすものとし、真に広い意味での世界における英語変種の研究ではないという立場をとりながらも、World Englishesという用語が多義で使用されていることを認めている (Jenkins, 2006, p. 159)。またSmith (1976) も、自身が提唱したEILと異なる点があるということについて言及している。それではつぎに、このSmith (1976, 1983, 2014) によるEILと、Jenkins (2000, 2003, 2007, 2009)、Seidlhofer (1999, 2001, 2004, 2006, 2011) が中心となったELFについてそれぞれみていきたい。

2. 2. EIL (English as an International Language): 概念としての国際語

Smith (1976, 1983, 2014) は、英語の拡大が英米語の支配的拡大であるととらえる見解を否定し、現代の英語の使用状況についてその多様性を容認しながら、英語の使用目的の多様化に着目した。彼はEILの基本的理念として、「英語は国際語であり、その所有権は母語話者のみならず、世界中のすべての人である」と明示したうえで、英語の所有権を主張するために英米人等のように話そうとする必要はないと主張した (Smith, 1976, p. 2)。英語における母語話者モデル以外の変種への積極的評価や、母語話者と非母語話者間の平等を主張した点については、前述のWorld Englishesと共通している。しかし、World EnglishesではEFL (外国語としての英語) よりESL (第二言語としての英語) の権利をより強く主張したのに対し、このEILでは、ESL、EFLではとらえきれない国際コミュニケーション上の使用目的の英語を国際補助語 (an international auxiliary language) として定義し、より広義に現代の英語のあり方を解釈している。それは、母語話者同士のあいだで、または母語話者と非母語話者間、あるいは非母語話者同士のあいだといった多様な状況で使用される言語であり、双方が多様性を認めながら、相互理解に尽力することの重要性を主張した。この相互理解には母語話者の努力義務や意識改革も含まれている (Smith, 2014, p. 133)。このEILは、言語学的により具体性のある言語体系の研究というよりはむしろ、現代の使用状況と照らし合わせた国際語としての英語の基本的概念の定義であるといえる。

2.3. ELF (English as a Lingua Franca) : 国際共通語としての実証研究

EILにおける、国内語ではなく国際語としての英語の機能への着目や、英語の脱英米化の観点からは、ヨーロッパで研究が始まったEnglish as a Lingua Franca (ELF) の概念にも共通しているものである。ELFは、JenkinsとSeidlhoferによって牽引されてきた比較的新しい研究分野である。ELFは国際共通語としての英語を特徴づけるのは非母語話者同士の英語であるとして多様性を重視し、母語話者規範にとらわれることなく、実際の非母語話者間のやりとりの中での相互理解度 (intelligibility) に焦点を置いた一連の研究分野である。それはこれまでの非母語話者英語研究や第二言語習得研究が、母語話者英語との比較分析を主とし、学習者としてのエラー分析の性質を保持してきた点と一線を画すものである。Jenkins (2009, p.42) は、いわゆる拡大円圏における英語使用であるEFLでは、母語話者の英語からの逸脱は英語運用能力の不足とみなされるのに対して、ELFでは正当な相違ととらえられ、EFLで母語からの転移や干渉、それが定着してしまった化石化と呼ばれるものに対しては、ELFでは言語接触と進化であるとし、その認識の違いを明示している。また、非母語話者によるコード・スイッチングについて、EFLでは英語知識不足を埋めようとする試みであるとマイナスに評価されるのに対して、ELFでは話者のアイデンティティや、相手との連帯感等を生み出す資源として積極的な評価をされる。つまり、母語の影響を受けた非母語話者による英語、母語話者とは異なる英語、または母語自体を活用した話者の方略がこれまでマイナスの扱いを受けてきたことを完全に覆す概念がELFであると主張しているのである。

また、ELFは多様性の中での相互理解達成への関心という点についても、EILと共通している。しかしながら、ELFの共通性に関心を置いた研究には、多様性を重視しているとしながらも、統一性により重点を置いているのではないかという指摘がなされている (Berns, 2008)。「共通語 (a lingua franca)」という用語自体が共通性、統一性を示しているとする立場もある。Murata & Jenkins (2009, p.3) は、ELFはWEやEILと同様に、母語話者規範にとらわれず、多様性を重視した概念であるのにもかかわらず、異なる第一言語をもち、多様な英語を話す話者同士のやりとりで用いられる英語という観点から、より統一性を重視していると誤解されると述べている。Jenkinsの音韻研究も、Seidlhoferの文法研究も、非母語話者的特徴における共通性の抽出を試みていることからこのような批判があがったとみられる。

しかしながら、この批判はELFにおいては的を射ていないように思われる。国際語としての英語には多様性が当然として存在しながらも、その多様な英語が互いに理解可能になるためには、共通性も必然として存在しなければならないからである。そうでなければ英語は国際語としての機能を果たしているとはいえない。問題となるのは、その共通性を守るべき規範として規定してしまうことであろう。国際語としての英語を話す際に、音声面における共通性をルールとして遵守すべきであるとし、英語教育でその規範に権限をもたせるとなると、それは統一性の主張にあたるといえる。しかし、Jenkins (2000) が検証したLingua Franca Coreは異なる母語をもつ話者たちが英語を使って意思疎通を図った際に実際にみられた言語の現象であり、その研究は記述的 (descriptive) であることに注目しなければならない。そこには、母語話者英語の規範に基づいた核が存在しているとされるのだが、それは現在の英語という言語のありのままの姿の一部をとらえたものであって、そうあるべきだという規範ではない。

これまで、現代の英語の諸相を示す研究であるWE、EIL、ELFについてみてきた。それぞれに差異があるが、多様性の重視という点では共通している。いずれかひとつが今日の国際語とし

での英語を完全に表す用語とはいえないかもしれないが⁵、逆にそのこと自体が国際語としての英語の特徴を表しているといえる。この三つの用語が提唱された経緯や批判は、現代の英語を考えるうえで重要な要素をもっているからである。英語がある特定地域の共通語となる際には、その地域固有の特徴を帯びた英語が生じ、地域の共通語ではなくても、非母語話者が英語を習得する際には母語などからなんらかの影響を受けた新たな英語が生じる可能性があり、英語の多様性には際限がない。しかし、国際的な共通語として英語が機能を果たすためにはどこかに共通性が存在することが前提となる。「多様性への理解」と「共通性の保持」、これこそが英語が世界的な共通語として、これまでに類をみない役割を担おうとしていることからくる大きな課題であるといえよう。

また、WEは外円圏のESLについて内円圏の母語話者英語と同等の地位を主張し、EILも同様に母語話者のみならず非母語話者における英語の所有権を強調し、ELFにおいては母語話者英語からの逸脱を誤りとせず、正当な相違だとした母語話者英語との対等性、母語話者英語からの解放という点について、3分野は共通している。しかし、言語態度の観点からは、母語話者英語に対して国際語としての英語が対等視されているとはいえない結果が報告されている。つぎに、英語に対する言語態度の諸相について概観し、共通語および標準語と規範主義について議論していきたい。

3. 標準語イデオロギーと規範主義

3.1. 国際語としての英語に対する言語態度

Jenkins (2007) は、日本、中国、ブラジル、スペイン、フィンランド等を含む拡大円圏の12カ国の326名（うち母語話者は26名、非母語話者は300名）の英語教師に対して、英語変種に関する調査を行なった。彼らがもっとも好ましいと回答したのは圧倒的にアメリカ英語⁶で、ついでイギリス英語であった。カナダ英語、オーストラリア英語などは、インド英語などと同様に低い割合にとどまり、母語話者英語の中でも、とくに強い英米語志向が明らかになった。「正確性 (correctness)」、「好ましさ (pleasantness)」、「国際的な受容性 (international acceptability)」の観点から、英米語が「最も良い英語」であると考えられる確固たる言語観が確認された。さらに、非母語話者英語（日本、中国、ブラジルの人びとが話す英語など）に対する態度についても調査が行われ、興味深い結果が報告されている。母語話者・非母語話者教師共通の英米語志向は前述のとおりであるが、非母語話者教師は母語話者教師よりも非母語話者英語に対して寛容度が低いことがわかった。「正確性」、「受容性」、「好ましさ」、「親しみやすさ」というすべての項目において、非母語話者教師は母語話者教師より否定的に評価をしていた。Jenkinsはこの理由として、非母語話者教師は強い標準語（英米語）イデオロギーを有しており、それが非母語話者英語への否定につながっているのではないかとしている。「正しい英語」や「良い英語」の強要は、自分たちが話す非母語話者としての英語に対する否定感を生み出すという。さまざまな英語変種に対して英米語が「標準語」であるにとらえられることによって、そこに標準語イデオロギーが生じ、特異な言語態度が生じるのである。

3.2. 標準語の社会的指標性

標準語に対する意識を検証した Trudgill (1975) のイギリスでの発音調査では、ある語彙についてどのように発音するのが正しいのかを質問し、自分が実際に発音したものよりも、自分が

そう発音するほうが望ましいと思う標準語の発音をしたと考えている人がいることを明らかにした⁷。これは、自分は標準語を話す人物であることを示したい標準語イデオロギーの表れであることがわかる。Labov (1972) はアメリカで、標準語に焦点を当てたというよりも、階級によって異なる発音についての調査を行なった。おおむね階級が上がるに従って相応の発音をするという結果が出たものの、スピーチスタイルがあらたまったものになるにつれて、階級が高い上流中産階級に属している人びとよりも、下流中産階級に属する人びとのほうが、そうすべき発音をより意識していたことが明らかになった(過剰修正 (hyper-correction))。これは、社会において自分がどのように話すべきであるかとらえているのかという意識と実際の発話(発音)との乖離・相関を検証した意義深い調査であった。

また、Labov (1966) は、標準とされる発音から離れている人ほど、それと同様の発音をする人に対して軽蔑したり、嫌悪感を示したりすることがあるとした。標準語イデオロギーは人びとのアイデンティティと関わるだけでなく、感情に関わる特定の言語態度を生起するといえる。標準語は中産階級、新中間層、教育を受けた者、都市民などを指標する上層変種という性質をもち、ときに、都会性、洗練、近代性、知性などといったステレオタイプが付与され、それに対して非標準語としての地域変種・地方方言は、労働(者)、土着(民)、身体(性)、田舎などといった下層変種という軽視、侮蔑を含む意味合いをもったステレオタイプが与えられてしまうからである(小山, 2011, p.206)。話者自身、およびその聞き手は、標準語、非標準語にそれぞれ付帯する社会的指標性に対して評価を下し、それが言語態度の形成につながっていくのである。

これらの研究は、英語母語話者による国内の標準語への態度を調査したものであるが、Labov (1966) によって明らかになった非標準語への態度はとりわけ、前項のJenkins (2007) の調査における非標準語としての英語への態度に類似している。非標準語の話者は同じような非標準語を話す話者の英語を嫌悪することがあるという点について、英語の非母語話者は同様の非母語話者が話す英語に対して寛容度が低い点と重ね合わせることができる。これは、標準語に対して非標準語があり、母語話者英語に対して非母語話者英語がつねに相対して存在する構造に起因している。

また、ここで着目したいのは「標準語」の話者が理想的な話し手としてとらえられている点である。実際には、標準語話者とされる人びとのだれもが言語使用能力のすべての側面で同じように話したり、適切にふるまったりするわけではない(Bachman, 1990, pp.248-249)。つまり、標準語は自然発生的に生じた実際の言語使用の諸相ではなく、意図的に定められた理想としての言語であって、人為的に形成されたものである。標準語は以下のように定義されている。

ある国または地域社会で大衆から最も高い評価を得て、社会的権威や強い影響力を誇示している特定言語変種を指す。話しことばや書きことばにおけるモデル(規範)とされ、一般的に報道・出版・儀礼的行事といった公的場面や学校教育などで広く普及している。[中略]ある特定変種が「標準語」としての地位を与えられる際の決定要因となるのは、純粋に言語学的基準ではなく、政治・経済・文化的価値観がもとなる。(小池, 2003, p.177)

標準語が制定される要因は、言語学的に適切であるからではなく、その特定言語変種の話者がもつ政治経済力をはじめとした社会的影響力が大きな役割を果たしている。英米語が世界のあらゆる英語変種に対して「標準語」ととらえられる理由も、アメリカ・イギリス両国がもつ政治経

済におけるパワーが根底にあることは明らかである。

英米語を標準語としてとらえることには、以下のような問題についても指摘することができる。Phillipson (1992) は、英語の拡大がイギリス・アメリカ両国の政治的、経済的、軍事的権力との関係性に依拠し、いわゆる強国のイデオロギーが言語支配といったかたちで世界各地に拡散していることについて問題視している。これを言語帝国主義 (linguistic imperialism) と呼び、英語が世界に普及することで問題なのは、英語を通して新しい心的構造 (mental structures) が押しつけられることであるとしている (Phillipson, 1992, p.166)。イギリスの植民地であった国々が、英語による教育を近代化や国家建設などの名目のもとに受けることになり、結果として本来その国の文化には相容れない西洋的な、あるいはより限定的にイギリス的なイデオロギーを植えつける構造ができていたと主張した。また、そのようなポスト・コロニアルの文脈ばかりでなく、イギリス政府によって設立された公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシル⁸が、世界各国における英語の普及を行うために使った広告戦略を批判している (Phillipson, 1992, pp.173-222)。それは「英語は英語で教えるのが最もよい」、「理想的な英語教師は母語話者である」などといった、応用言語学、英語教授法の分野でいわれる言説であるが、これらの根底には、母語話者の優位性という認識があることが指摘されている。Phillipsonはこのような概念を内包した英語教育を行うことによって、単一言語重視の英国中心主義的なイデオロギーが世界に拡散していくのを懸念し、標準語として英米語を規範とし、それに従うことによって強国のイデオロギーが植えつけられていることへの警鐘を鳴らしている。

こうした立場に立てば、手放して英米語を理想的な標準語ととらえることには危険がともなうのがわかる。また、小山 (2011) による標準語に対する態度の見解は、日本語における標準語についてのものでありながらも、標準語としての英米語に対する態度を考えるうえで示唆を与えてくれる。

ナショナリズム、近代化、そして「公共圏」、「国民共通語」というイデオロギーや社会文化装置の強さのゆえ、「日本国民」となった人々にとって、標準語は意識せざるをえない規範であり、この規範に従うのか、抵抗するのかにより、人々のアイデンティティ (都市民か地方人か、近代主義者か反近代的伝統主義者か、新中間層か労働者か、国語主義者か多方言・多言語主義者か、国民文化主義者か多文化主義者か、など) が示されてゆく。(小山, 2011, p.207) [強調原文]

ここでは、日本国民にとって標準語が意識せざるをえない「規範」であると述べられているが、国際的な共通語として英語を話す話者たちにとって、英米語はやはり意識せざるをえない規範であり、そこからの逸脱を正当とするのか、あるいは誤りとするのかによって国際語としての英語の話者としての態度が示されることになる。標準語としての英米語が指標するアイデンティティは、英語が使用されるコンテキストによって多様であるが、話者はその態度によってどのようなアイデンティティが表出しているのかを考える必要があるといえる。

3.3. 標準語イデオロギーと規範主義的態度

標準語に対する態度は話者のアイデンティティを指標するが、標準語を強く意識することによって生じる標準語イデオロギーは、それ以外の変種に対して排他的な態度を生起させる。ミルロイ&ミルロイ (1988, p.86) は、「標準語イデオロギーが言語に対する規範的態度を生む。それ

は、ある言語の中には正しいとされる用法（音声・綴り字・文法・意味の各面での）が一つ、そしてただ一つだけ存在するという信念である。」と述べている。そしてこの規範主義についても、「伝統的な規範主義は、標準語イデオロギーを浸透させるはたらきももっている」（ミルロイ&ミルロイ, 1988, p.128）と述べ、標準語イデオロギーと規範主義は密接に相関し、双方に依存した関係であるとした。ある言語の標準語化が行われ、それに対するイデオロギーが形成されるようになると、必然として規範主義的態度が生起する。規範主義が強化されることによって、また標準語イデオロギーも増幅していくのである。

ミルロイ&ミルロイ（1988）はイギリス国内における近現代の規範主義の傾向を批判する立場をとり、規範からの逸脱を指摘し非難する人びと（言語学者や一般の人びと）を「ことばの守り神」と呼んだ。その規範の守り神である彼らは、実際に言語が使用されている「言語運用」よりも、辞書や文法書の規範による「言語体系」を過度に重視しすぎていることを指摘し、different fromとdifferent toの用法を例にあげている。この場合、fromとtoのどちらを選択しても意味の変化が生じるわけではなく、選択は任意的なものであり、実際にはどちらも使用されている。言語運用面から考えれば、He ran to the house.とHe ran from the house.のように全く意味が変わってしまう場合とは異なるので、differentのあとにはどちらがきても支障がないはずである。しかし、言語体系である規範に忠実であろうとする規範主義者たちのあいだでは、これはどちらかが正しいと決定づけるべきであるという論争が生じる。Fromを用いるのが正しいとする立場からは、動詞differのあとにはfromをとり、differ toとは言えないことから、その正当性を主張する声があがり、toを用いるべきだとする立場からは、比較を表すsimilarやequalなどの語句はtoをうしろにとると主張、さらに、スコットランドやアイルランドなどでとくにみられるdifferent thanという用法についても比較級の用法をもち出して、fromとtoに対抗して正しいとする主張もみられるという。つまり、どれを使用したところで意味に支障がなく、言語運用上問題のないと思われる用法にも多様性を認めず、ただひとつのみが正しいと考える態度が規範主義的な態度なのである。

さらに過度な規範主義の問題点は、いわゆる規範主義者たちがこの問題を言語学上の問題であるにとらえ、もともと標準語が規定された経緯をみてもわかる社会学的問題であると考えていない点であるという。文法や語法といった言語学上の理論における違いに議論が終始し、そのように一つの形だけに正しさを求めようとする態度が、多様性を容認できない排他的な規範主義となり、偏った言語態度を生み出していることに気がついていない点に問題があるとしている。標準語とされるものの範疇においても、すべてこれ一つだけが正当な基準であるという確定をすることは実際には不可能であり、標準語の中にもある程度の幅が存在しているにもかかわらず、唯一のもののみが正しいと認められることを希求し、それ以外を棄却しようとする態度自体の不合理性を、規範主義者たちは認識していないというのだ。なぜ認識できないのかという点について、以下のように述べられている。

「標準英語」なる規定は、いささかあいまいかつ非科学的な規定であると断ぜざるをえなくなってくる。何をもって標準語とするかは、言語上の習慣として人々（その多くは権威のある人々だが）に受け入れられている共通領域のことで、当然のことながら、その周辺にはどちらともつかないあいまいな領域が残されることになる。イデオロギーとしての標準語は、その効用とは裏腹に、標準語という概念が必然的に持つあいまいさを覆い隠す役目も果たし教養の高い人々でさえ言語というものを極端に単純化してとらえてしまう弊

害さえももたらしている。(ミルロイ&ミルロイ, 1988, p.49)

つまり、標準語イデオロギーという概念自体が、本来標準語がもつとされる言語的な幅、あいまいさを見えなくしてしまっているのである。「教養の高い人びと」でさえ、言語を単純化してとらえ、その社会的な意味合いを見落としてしまっていることを指摘している。

標準化された変種である標準英語は、言語学上の形式のみならず、英語という言語自体への標準化されたイメージを単純化して体現してしまうことも考えられる。久保田 (2008, p.17) はこの点について以下のように述べている。

標準語化には、言語形式や社会行動の規定だけでなく、言語自体の特殊性についての言説を構築する面もある。言い換えれば、ある言語の特徴とは何かを規定する「言語観の標準化」とも考えることができ、文化観の構築にもつながる問題である。

たとえば、極端な例をあげるとすれば、日本では一般アメリカ語が一般的な学習モデルとされているが、いわゆる英会話のテキスト等のやりとりにおいて、初対面でも気さくなあいさつを交わし、ファーストネームで呼んでほしいと頼んだりする場面はよく見受けられる。これが英語における標準として学習者に固定化されてしまうと、英語でのやりとりはつねにこのような基準で行われるという言語観が標準化されてしまうことがあるという問題である。実際には、アメリカ英語にもレジスター（使用域）の違いによる使い分けがあるうえに、地域変種の差、年代、性別、人種、民族間の使用の差も存在する。さらにイギリス英語における階級差などのすべてが不可視化されてしまう。英語を学び始めて間もない未成年の生徒たちが、すべての使用の違いについて知識を与えられることは不可能であり、その必要もないが、英語の学習者でなく、英語の話者となる彼らにとって、「英語とはこのような言語である」とあまりにも単純化された言語観を抱いてしまうことの代償は大きいといえる。単純化されたイメージをもって話される英語を通じて、他者から自分という話者が理解されてしまうことがあるからである。言語が指標するアイデンティティや信条、パーソナリティ等に対して意識を向けることが、国際語としての英語の話者には求められるといえる。この点においては、標準とされ単純化した規範にただ忠実であろうとする態度よりも、言語がもつより社会的な側面への気づきが重要な役割を果たすと考えられる。

4. おわりに

本稿では、国際的な共通語の役割を担う英語をめぐるさまざまな状況、および問題点について議論してきた。英語が歴史的に類をみないほどの広がりを見せ、その地位を確立してきたことに起因する「多様性」と「共通性」の問題を検証し、拡大化（国際化）にともなって多様化するのは必然のことであるが、同時に共通語として機能するためには共通性も確保されなければならないという問題に言及した。国際語としての英語を研究する学術分野であるWE、EIL、ELFでは、いずれも多様性の重視、母語話者規範からの解放という点で共通しているが、言語態度の観点からは、母語話者英語に対して国際語としての英語が対等視されているとはいえない結果が示された。それは母語話者英語（とくに英米語）が標準語ととらえられていることに起因した態度であった。

標準語は、言語のありのままの形態というよりむしろ、国家政府などが規定した、人為的に作

られた規範であり、ナショナリズム、近代化などといった社会的指標性が付帯し、時に都会性、洗練などといったステレオタイプも付与されることから、標準語を話すかどうかはその話者のアイデンティティにかかわる問題につながる。また、標準語に対する強い意識である標準語イデオロギーは、それ以外の変種に対して排他的な態度を生起させる。唯一の標準語の規範だけが正しいものであると考える規範主義である。これは言語運用よりも言語体系を重視した態度であるといえ、言語というものを単純化してとらえてしまう弊害をもたらしている。

現代の国際語としての英語の話者には、ひとつの規範を求めてそれに忠実であることよりも、言語運用や実践により着目し、ことばがいかに使用され、いかに機能し、ことばを使用する際には何が重要であるのかということ意識することが必要である。それこそがWE、EIL、ELFに共通した、真の母語話者英語からの解放につながる手立てとなり、そのような気づきをもってして、共通性を保持しながらも多様な英語の一種を話す英語話者となると考えられる。

註

- 1 Kachru (1992) のモデルや他の多くの研究者は、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの5カ国をInner Circleの国としているが、Crystal (2003) はアイルランドを加えている。また、Melchers & Shaw (2003) はさらに南アフリカ共和国、リベリア、カリブ諸島の各英語変種等も含めている。
- 2 インド、シンガポール、フィリピン、マレーシアといったアジアの国々や、ガーナ、ケニア、ナイジェリアといったアフリカの国々が含まれる。
- 3 日本や中国、ロシア、エジプト、イスラエル、サウジアラビア等の国々が含まれる。
- 4 クレオールとは、共通語をもたない人びとのあいだで発生する言語であるピジンが、ある言語社会の母語となる時に生まれるものとされている。ピジンは文法と語彙が縮小される一方で、音韻的な変異は豊かであるのに対し、クレオールはピジンよりも洗練された、あるいは体系化された言語に発達する場合がほとんどであるとされている (Todd, 1974; Holm, 1988)。世界各地には多くのピジンとクレオールが存在するが、ハワイ・クレオール (Hawaiian Creole English) 英語などを筆頭に、英語を基盤としたクレオールはもっとも多いとされている。
- 5 他にも研究者によってさまざまな別の名称がつけられている。English as a global language (Crystal, 1997; Gnutzmann, 1999)、English as a world language (Mair, 2003)、World English (Brutt-Griffler, 2002)、Global Englishes (Pennycook, 2007) など。
- 6 ここであげられる各国英語についてはいずれもその地域内での標準英語とされるものである。
- 7 同時にこの調査では、男性よりも女性のほうがその傾向が強いことも示した。
- 8 1934年に設立されたイギリスの非営利団体で、各国における英語の普及や、イギリスと諸外国間の教育・文化交流を目的としている。

参考文献

- Bachman, L. F. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Berns, M. (2008). World Englishes, English as a lingua franca, and intelligibility. *World Englishes*, 27(3/4), 327-334.
- Bolton, K. (2002). *Hong Kong English: Autonomy and creativity*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

- Brutt-Griffler, J. (2002). *World English: A study of its development*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Crystal, D. (1997). *English as a global language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (2003). *English as a global language* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Gnutzmann, C. (Ed.). (1999). *Teaching and learning English as a global language*. Tübingen: Stauffenburg-Verl.
- Halliday, M. A. K., McIntosh, A., & Stevens, P. (1964). *The linguistic sciences and language teaching*. London: Longman.
- 平賀正子 (2016). 『ベーシック新しい英語学概論』ひつじ書房.
- Holm, J. (1988). *Pidgins and creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Honna, N. (2008). *English as a multicultural language in Asian contexts: Issues and ideas*. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2003). *World Englishes: A resource book for students*. New York: Routledge.
- Jenkins, J. (2006). Current perspectives on teaching World Englishes and English as a lingua franca. *TESOL Quarterly*, 40(1), 157-181.
- Jenkins, J. (2007). *English as a lingua franca: Attitude and identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2009). Exploring attitudes towards English as a lingua franca in the East Asian context. In K. Murata & J. Jenkins (Eds.), *Global Englishes in Asian contexts: Current and future debates* (pp. 40-56). Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan.
- Kachru, B. B. (1976). Models of English for the third world: White man's linguistic burden or language pragmatics. *TESOL Quarterly*, 10(2), 221-239.
- Kachru, B. B. (1982). Models for non-native Englishes. In B. B. Kachru (Ed.), *The other tongue: English across cultures* (pp. 31-57). Urbana, IL: University of Illinois Press.
- Kachru, B. B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle. In R. Quirk & H. G. Widdowson (Eds.), *English in the world: Teaching and learning the language and literatures* (pp. 11-30). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kachru, B. B. (1992). *The other tongue: English across cultures* (2nd ed.). Urbana, IL: University of Illinois Press.
- Kachru, B. B. (2005). *Asian Englishes: Beyond the canon*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Kachru, B. B., Kachru, Y., & Nelson, C. L. (2006). *The handbook of World Englishes*. Oxford: Blackwell.
- 小池生夫 (編集主幹) (2003). 『応用言語学事典』研究社.
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論：記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』三元社.
- 久保田竜子 (2008). 「ことばと文化の標準化についての一考」佐藤慎司・ドーア根理子 (編著) 『文化、ことば、教育 日本語 / 日本の教育の「標準」を超えて』 (pp. 14-30). 明石書店.
- Labov, W. (1966). *The social stratification of English in New York City*. Washington, D. C.: Center for Applied Linguistics.
- Labov, W. (1972). *Sociolinguistic patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Mair, C. (Ed.). (2003). *The politics of English as a world language*. Amsterdam: Rodopi.
- Melchers, G., & Shaw, P. (2003). *World Englishes: An introduction*. London: Arnold.
- ミルロイ, J.・ミルロイ, L. (1988) 『ことばの権力 — 規範主義と標準語についての研究 —』 (青木克憲・訳). 南雲堂. [原著: Milroy, J., & Milroy, L. (1985). *Authority in language: Investigating standard English*. London: Routledge.]
- Mufwene, S. S. (2006). Pidgins and creoles. In B. B. Kachru, Y. Kachru & C. L. Nelson (Eds.), *The handbook of World Englishes* (pp. 313-327). Oxford: Blackwell.
- Murata, K., & Jenkins, J. (2009). Introduction: Global Englishes from global perspectives. In K. Murata & J. Jenkins (Eds.), *Global Englishes in Asian contexts: Current and future debates* (pp. 1-13). Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Pennycook, A. (2007). *Global Englishes and transcultural flows*. London: Routledge.
- Phillipson, R. (1992). *Linguistic imperialism*. Oxford: Oxford University Press.
- Prator, C. H. (1968). The British heresy in TESL. In J. A. Fishman, C. A. Ferguson & J. Das Gupta (Eds.), *Language problems of developing nations* (pp. 459-476). New York: Wiley.

- Seidlhofer, B. (1999). Double standards: Teacher education in the Expanding Circle. *World Englishes*, 18(2), 233-245.
- Seidlhofer, B. (2001). Closing a conceptual gap: The case for a description of English as a lingua franca. *International Journal of Applied Linguistics*, 11, 135-158.
- Seidlhofer, B. (2004). Research perspectives on teaching English as a lingua franca. *Annual Review of Applied Linguistics*, 24, 209-239.
- Seidlhofer, B. (2006). English as a lingua franca in the Expanding Circle. *World Englishes*, 18(2), 233-245.
- Seidlhofer, B. (2011). *Understanding English as a lingua franca*. Oxford: Oxford University Press.
- Smith, L. (1976). English as an auxiliary language. *RELC Journal*, 7(2), 38-53.
- Smith, L. (1983). *Readings in English as an international language*. Oxford: Pergamon.
- Smith, L. (2014). *Teaching English as an international language (EIL) in Hawaii: The case of the global cultural exchange program (GCEP)*. 塩沢正・榎木蘭鉄也・倉橋洋子・小宮富子・下内充 (編著). 『現代社会と英語：英語の多様性をみつめて』 (pp.133-139). 金星堂.
- Todd, L. (1974). *Pidgins and creoles*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Troike, R. C. (1977). The future of English. *The Linguistic Reporter*, 19(8), 1-5.
- Trudgill, P. (1975). *Accent, dialect and the school*. London: Arnold.
- Wolfram, W. (2006). African American English. In B. B. Kachru, Y. Kachru & C. L. Nelson (Eds.), *The handbook of World Englishes* (pp. 328-345). Oxford: Blackwell.
- Yano, Y. (2009). The future of English: Beyond the Kachruvian three circle model? In K. Murata & J. Jenkins (Eds.), *Global Englishes in Asian contexts: Current and future debates* (pp.208-225). Basingstoke: Palgrave Macmillan.